蚕業につくした人々

佐藤友信（1718～1786）

掛田の蚕種家である佐藤家の８代目として生まれました。

父親の正信ののこしたやく50さつの養蚕帳（蚕の育て方やさまざまなことがらについて書いてあるもの）をもとにして、1766年に、「養蚕茶話記」を書きました。この当時では、最高の養蚕についての本でした。日本でも一番古い養蚕の技術の本と言われています。

安田利作（1847～1896年）

（むかって左）

1847年に、掛田村の商家に生まれました。利作の家は、まわりの村から生糸や絹を買い集めて、他の地方へ売ったり、蚕の種を作って売ったりする大きな店でした。

利作は外国へも生糸を輸出しようとしましたが、糸の取り方が不完全でうまくいきません。利作は何回も失敗しながらようやく、「折り返し糸」をつくり出しました。「掛田折り返し糸」と名づけて、外国にも輸出しました。さらにたくさんの人びとと力を合わせて、さまざまな展覧会にも生糸を出品しました。第１回全国蚕糸共進会で、利作をはじめとして18名が入賞しました。

これにより、掛田はますます有名になりました。利作は、その時その時の生糸の値段を調べるためにわざわざ横浜から「内外生糸商況日報」をとりよせていました。そして、いつ売れば高く売れるのかを研究していました。利作が中心になって建てた「掛田養蚕伝習所」は、多くの人の協力で、全国のたくさんの人に養蚕の技術を教えました。